

論 説

「芝山巖精神」の形成過程

—1920年代後半から1930年代の学校における集団参拝を中心に—

山本 和行

はじめに

第1節 「芝山巖精神」という表現

第2節 芝山巖への「参拝」

第3節 芝山巖に参拝しない学校における活動

おわりに

(要約)

本稿は芝山巖上に「神社同様の体裁」をまとった施設が整備された1930年以降、戦時中に「芝山巖精神」という言葉が頻出するようになるまでの時代において、「芝山巖精神」なるものがどのような現実的基盤のうえにイメージされるようになっていったのかという課題について検討をおこなう。そのために本稿は、いわゆる「六氏先生」や台湾で「殉職」した教職員の慰霊を目的に、台湾教育会が主催する形で毎年2月1日に開催されていた「芝山巖祭」への集団参拝や、学校教育を通じた「芝山巖」へのかかりについて、おもに1920年代後半から1930年代の動向を中心に検討する。こうした検討の結果、1930年代までに形成された「芝山巖」をめぐる具体的な経験のもとで、戦時下において「芝山巖精神」の「発揚」が進められていくことを明らかにした。

はじめに

日本統治下、芝山巖は「芝山巖事件」の発生地、および「芝山巖精神」発揚の場として位置づけられていたといわれている。それは、植民地統治下の台湾で教職につき、近年、芝山巖事件に関する著作を出版した篠原正巳による、以下のような叙述に典型的に表れている¹。

およそ台湾で教職にあった者で「芝山巖精神」という言葉を耳にしなかったものはあるまい。教師仲間の合言葉のようなものであった。私もその一人であるが、考えてみると芝山巖精神とはなにかについて、つきつめた議論はあまりなかったように思う。一般には六氏の最後と結びつけ、「たおれて後やむ精神」と理解されていた……教師としての使命を自覚して教えの道に徹し、名利や見返りを求めぬ無私の精神、これが芝山巖精神というべきものであろう。芝山巖精神というのは、何も声高に叫ぶような格別のものではなく、教育に携わる者の教場に臨む日常の心構えである。

「六氏の最後」、つまり1896年に発生した「芝山巖事件」から派生した「芝山巖精神」という言葉を、植民地教育を担った人々の「日常の心構え」として、時代を超えても通用するかのような、一般的な考え方へと脱色する試みがなされている。

しかし、「一般には六氏の最後と結びつけ、「たおれて後やむ精神」と理解されていた」と述べているとおり、篠原が「芝山巖精神」について抱いている「一般」的なイメージは、「たおれて

後やむ」という戦時期に流通したスローガンとともに捉えられている²。それはたとえば、1943年2月1日の『台湾日日新報』に掲載された「芝山巖祭」の開催を報じる記事のなかで、「あゝ斃れて後やむ／この遺烈千載に伝へん」、「労働万世に薫る不動の芝山巖精神」といった見出しが躍っているような状況のことを指している³。

これまでの研究は、植民地統治開始当初に発生した「芝山巖事件」が、ここに述べたような特定の時代性を帯びた「芝山巖精神」へと展開していくプロセスについて、十分な検討をおこなってきたとは言い難い。たとえば、一次史料に基づき、「芝山巖事件」に関する考察をおこなった上沼八郎は、「芝山巖事件」を「台湾植民地教育行政史を研究する上での導入的考察」と位置づけ、事件の概要と伊沢学務部長時代の「六氏先生」に対する慰霊の経緯についてのアウトラインを描き出した⁴。ここで、上沼が「芝山巖事件」に関する考察を、「台湾植民地教育行政史を研究する上での導入的考察」（傍点筆者）であると述べているように、「芝山巖事件」に対する詳細な検討は「芝山巖精神」の検討へと進んでいくと、ひとつつながりのものとして必ずしも想定されていたわけではない。

「芝山巖事件」から「芝山巖精神」への展開の過程をめぐっては、植民地教育史の視角の外においてそのアウトラインが示されている。児童文化・文学史の研究者である上笙一郎は「日本植民地児童文学史」をテーマに多様なトピックを綴った小文において、「芝山巖事件」から「芝山巖精神」へと至る経緯について触れている⁵。上はその経緯を「〈芝山巖精神〉の発揚」のプロセスとして整理し、「まず、言葉や文章ではなくて、物的に〈形あるもの〉をもって始まった」とし、「これに次いで始められたのが〈形を持たぬ〉運動」であると指摘している。そして、前者の表れとして、「学務官僚遭難之碑」の建立（1896年）、「芝山巖祭」の毎年開催、「六氏先生」の靖国神社への合祀（1898年）、「教育殉職者」の芝山巖への合祀（1905年）、「芝山巖神社」の造営（1930年）を挙げ、後者の表れとして、『台湾教育会雑誌』・『台湾教育』における「芝山巖事件」への言及や台湾教育会編『芝山巖誌』の刊行、公学校用教科書における「芝山巖事件」の教材化を挙げている。

このように「芝山巖事件」から「芝山巖精神」への流れを捉えた場合、「形あるもの」から「形を持たぬ」ものへと展開していった、そのあいだの関係性をどのように捉えるかという疑問が生じる。とりわけ、1930年のいわゆる「芝山巖神社」と呼ばれる施設の整備以降、「形を持たぬ」ものへと展開していった動き、たとえば上述したような形で戦時中に「芝山巖精神」が語られるようになっていった状況はそれぞれ別のものとして展開していったわけではなく、それぞれの相互作用のもとで展開されていったものと考えられる⁶。「芝山巖事件」が「芝山巖精神」へと展開していくプロセスを明らかにするためには、「形あるもの」と「形を持たぬ」ものとのあいだの連関を明らかにする必要があるといえる。

本稿は以上の視点から、教育の現場である学校において、「形あるもの」と「形を持たぬ」ものとの相互作用のもとで展開された「〈芝山巖精神〉の発揚」のプロセスについて検討する。具体的には、「六氏先生」と「殉職」した教員の慰霊を目的に、台湾教育会が主催する形で毎年2月1日に開催されていた「芝山巖祭」への学校生徒および教職員による集団参拝、および芝山巖

にかかわる教育活動の展開について検討する。検討を通じて、「芝山巖精神」という言葉が、植民地教育を担った人々の「日常の心構え」として回想されるような状況がどのような現実的基盤のうえに生じていたのかということをも明らかにし、「〈芝山巖精神〉の発揚」の一端を解明することを目指す。

なお、史料としては、台湾教育会の機関誌であった『台湾教育』を主に使用し、補足的に『台湾日日新報』の記事を使用する。また、諸学校における「芝山巖」とのかかわりについては、学校における教育活動をうかがうことのできる学校沿革誌も使用する。本稿で検討する「芝山巖精神」や「芝山巖祭」をめぐるのはすでに別稿で指摘したように、台湾総督府の公文書などの一次史料を活用することが難しいという問題を抱えており⁷、こうした史料上の制約を抱えたうえでの検討であることを付記しておく。

第1節 「芝山巖精神」という表現

まず、本稿で検討する「芝山巖精神」という表現が、いつから、どのような意味を帯びたものとして使われるようになっていったのかについて、「はじめに」で触れた上笙一郎の指摘を踏まえ、台湾教育会が発行していた機関誌『台湾教育』における使用例から検討を加える。なかでも、巻頭に毎号必ず掲載される「社説」には毎月の教育に関するトピックが取り上げられており、「社説」の内容を通覧することで通史的な変化を捉えることができる。また、台湾教育会は1905年から毎年2月1日に芝山巖上で「芝山巖祭」を主催しており、このタイミングに合わせて「社説」で芝山巖に関する内容に多く言及しているため、その取り上げ方の変化を見て取ることができる。

以上の点を踏まえて『台湾教育』の「社説」欄の内容を見ていくと、文中に初めて「芝山巖精神」という表現が使われるのは、1928年2月の『台湾教育』第306号の「社説」である。記事のタイトルが「芝山巖精神」となっており、以下のような文章のなかで「芝山巖精神」という言葉が使われている。

二月一日、今日は芝山巖で亡教育関係者諸氏の祭典の行はるゝ日である。いふ迄もなくこの聖域に祀らるゝは本島新教育の創始者たる伊沢修二先生、遭難六氏先生及び二百六十五名（今年迄の合祀者）の殉職教育関係者諸氏である。而して伊沢先生の高邁なる識見、六氏先生の激越なる気魄、殉職教育諸氏の格勤忠実なる風格等皆吾人の最も欽仰する所であるが、殊に感激に堪へざらしむるものは是等諸先輩の精神を一貫する「教育を以て至誠国に報ずる」の一念である。所謂芝山巖精神である。

まず、芝山巖に合祀されている「諸先輩の精神」を「教育を以て至誠国に報ずる」、いわゆる「至誠報国」であったとしている。このような形で教育にかかわる者が持つべき「精神」を「諸先輩」は体現していたのだという捉え方は、この「社説」が掲載された1928年よりも前の「社説」にも散見されるものである。たとえば、「芝山巖三十年祭」を記念して発行された1925年2月の『台

湾教育』第272号の「社説」では、以下のように言及されている。

烏兎匆々三十年、今や丘上には伊沢先生、六氏先生をはじめとして二百二十五名の英魂が鎮まりましてゐる。何れも皆本島教育の為に最善を尽し、斃れて而して後に已みたる人々である。

「はじめに」で触れた篠原正巳が言及していた「たおれて後やむ精神」という表現が、この「社説」でも芝山巖に合祀されている人々が体現していたものとして触れられている。しかし、これが「芝山巖精神」だと概括されるような構成にはなっておらず、そもそも「芝山巖精神」という表現自体が文中には見当たらない。

また、この記事の翌年、1926年2月の『台湾教育』第284号の「社説」では「殉教者の態度」というタイトルで、以下のように「殉教者」の「精神」について言及している。

凡そ教育といひ宗教といひ精神的事業に従事するものは、寡を以て衆に当るのが普通であるから、よほど強固な信念を持ち、熱烈な態度で奮闘しなければ到底化導の実は挙らない……六氏其の他亡教育者諸氏の精神は適にこれであった。本島教育現在の成績は実に是等先輩の賚である。さうして本島教育は常にこの殉教者的態度で行はれなくては、終局の目的を遂げ得ないであらうと思はれる。

ここでも「六氏其の他亡教育者諸氏の精神」がどのようなものであるかということについて言及されているが、それが「芝山巖精神」であるというような説明はなされておらず、その「精神」を概括するようなキーワードも見当たらない。「芝山巖精神」という言葉は、毎年、以上のような形で言及されてきた「諸先輩」の「精神」を端的に表現するものとして1928年ごろを境に顕著に使用されるようになっていったことがうかがえる。

このことは『台湾教育』誌上だけの動きというよりも、その他の関連資料からも推察される。たとえば、植民地統治下の台湾における教育政策の展開について検討する際に使用される二次資料として、台湾教育会編『台湾教育沿革誌』と並んでよく使われてきた吉野秀公『台湾教育史』は、1927年10月に初版本が発行されている。このなかで、「芝山巖事件」についてまとめた章のなかに「嗚呼芝山巖」という項目が立てられ、上記の「諸先輩」の「精神」について以下のように言及されている⁸。

台湾教育精神、それは時と共に変化するであらう、而も其の信念の第一義に立つべき事は今も昔も異なる処はない筈である、信念を以て始められ信念を以て終始する、これ亡教育家の後人に示した処である、台湾教育の偉大さ崇高さは後人をして襟を正さしむるものがある／嗚呼芝山巖頭千古不朽の名を留めて英霊永へに静かに眠る、而も台湾教育の大精神は靈域芝山巖に源を発し滾々として千古尽くる処を知らない。

一見して、「芝山巖精神」という表現が使用されていても不自然ではないような箇所、「台湾教育精神」および「台湾教育の大精神」という表現が使われている。初版本の出版時期から考えて、1927年の時点で「芝山巖精神」という言葉がまだ使われていなかったか、少なくとも教育界においてさえ、まだ人口に広く膾炙した言葉にはなっていなかったものと考えられる。

他方、『台湾教育』誌上では1928年以降、「芝山巖精神」という言葉がたびたび使われるようになっていく。1929年2月の『台湾教育』第318号の「社説」では「今二月一日、芝山巖祭典の日は実に我が台湾の教育記念日である……我等は今日の記念日に当り、全島教育者諸君が益々芝山巖精神の發揮に努められ、先人地下の靈を慰められんことを祈るものである」というように、「芝山巖精神」とはどのようなものであるかという説明もなく、その「精神」を「發揮」することが教育を担う人々にとっては当たり前であるかのように言及されている。

ただ、こうした「芝山巖精神」という表現をめぐる捉え方は、この当時、『台湾教育』誌上、および『台湾教育』を読んでいた教育関係者の一部にのみ通用していたものだったようである。『台湾教育』第318号には、当時、台北第一師範学校の学校長だった志保田銆吉の「芝山巖精神について」（論題原文ママ）という文章が掲載されているが、このなかで志保田は「芝山巖精神」という言葉の認知度について、以下のように言及している。

二三年前の芝山巖祭の当日の事であった。頒たれた雑誌「台湾教育」を手にした教育者外の参拝者の一人が巻頭の「芝山巖精神」といふ語を見て「いろ／＼の精神があるな」と口ずさむのを聞いたことがある。自分は苦笑を禁じ得なかったがこの人には恐らく六士先生の真精神がよく分ってゐなかつたのであらう。祭典に列して碑前に立つ人尚然りである。世間一般の人にはこの人以上に芝山巖精神を知らない人が多いと思はれる。いや／＼教育者間に於てさへまだ／＼この事績と精神が徹底して居ないかとも思はれる。

「世間一般の人」はおろか、「教育者」においても「芝山巖精神を知らない人」が多いという志保田の実感、この言葉がまだ生まれて間もないものであることを示している。また、「教育者外の参拝者の一人が巻頭の「芝山巖精神」といふ語を見て「いろ／＼の精神があるな」と口ずさんでいたことは、「芝山巖精神」という言葉が馴染みのない、新奇なものであったことを示唆している。

以上のことから「芝山巖精神」という言葉はその使用が認められる時期にあっては、いわゆる「六氏先生」のような「諸先輩」が体現していた「精神」というように内実のはっきりしないものとして示されており、少なくとも1930年代に入るまでは、ごく一部の限られた者にしか知られていなかった表現であったといえる。

なお、「はじめに」で触れた『台湾日日新報』の記事において「芝山巖精神」という言葉が初めて使用されたのは、管見の限り、1938年2月1日の『台湾日日新報』に掲載された退職教員石原静三の講演録「芝山巖の由来と芝山巖精神」である⁹。これは、講演の題目がそのまま記事の見出しになったものであり、『台湾日日新報』自身が「芝山巖精神」という言葉を使用して記

事にしたものは、1942年1月24日の夕刊に掲載された「芝山巖六氏の遺烈／師範修身書に採択／学徒に芝山巖精神鼓吹」という記事が初出である¹⁰。一般紙におけるこうした用例は、志保田が1929年に指摘していた「世間一般の人にはこの人以上に芝山巖精神を知らない人が多い」という状況が、1930年代に入ってもなお継続していたことを示唆している。

第2節 芝山巖への「参拝」

1. 「神社同様」の施設の設置

1930年2月1日に芝山巖で開催された「芝山巖祭」は、例年どおりの祭典に加えて、芝山巖に造営された「社殿」の「鎮座祭」がおこなわれた。その経緯については、『台湾教育』第331号（1930年2月）の「社説」で、以下のように説明されている。

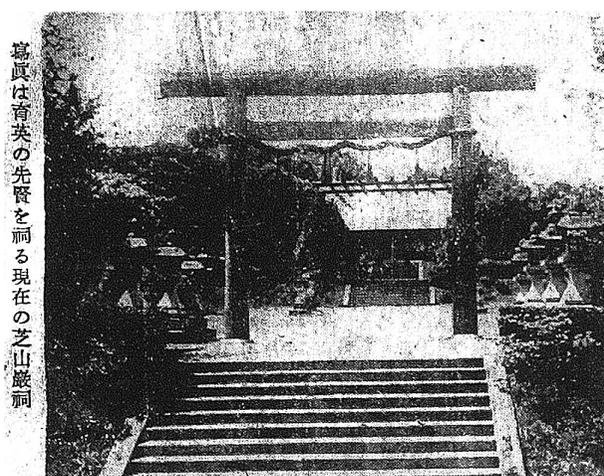
顧みれば芝山岩の改修工事は今度が第三回目であるが、今回は前二回と頗る其の趣を異にしている。これまでは概ね境域を整理するとか、階段を設けるとかいふ類であったが、今回は新に本殿拝殿を設け、玉垣を廻らし神門を立て、其の上常時奉仕するものの宿舍まで建て添へたのであるから、従来の面目は一新されて外容全く神社同様の体裁を備へるに至った

ここで言及されている「神社同様の体裁を備へ」た施設群が、「はじめに」に挙げた上笙一郎も言及していた、いわゆる「芝山巖神社」と呼ばれているものであるが、これらの施設は制度上、正式な「神社」ではなかったと考えられる¹¹。

しかも、これらの施設を「神社」と呼ぶようになったのは、戦後のことではないかと推察される。たとえば、前節で検討の資料として使用した『台湾教育』では、1943年3月の『台湾教育』第488号において「本島教育発祥の地芝山巖頭の露と消えし遭難学務官僚楫取道明氏等六氏並に亡き教育者の英霊を齋き祀る芝山巖祠第四十八回例祭は二月一日同祠に於いて厳粛に行はれた」と言及されており、「芝山巖祠」という表現が使われている¹²。また、1930年代以降は『台湾日日新報』においても芝山巖祭の様子が報じられているが、そのなかでもたとえば、以下の写真1のキャプションに「写真は育英の先賢を祀る現在の芝山巖祠」とあるとおり、「芝山巖祠」という表現が使用されている¹³。

また、『台湾日日新報』が1944年2月1日に報じた芝山巖祭の様子を伝える記事においても、「師魂永久に安かれ／先賢の遺徳を偲ぶ／けふ芝山巖祠祭典厳修」と書かれており、「芝山巖神社」という表現は見当たらない。1930年に芝山巖に整備された施設はあくまで「神社同様の体裁」をまとったに過ぎないものであり、一般には「芝山巖神社」ではなく「芝山巖祠」という名称で呼ばれていたものと考えられる¹⁴。

ただ、芝山巖に整備された「神社同様の体裁」をまとった施設が制度上の「神社」ではないとしても、1930年以前のように祭典をおこなうために臨時で祭壇などが芝山巖に設営されるのではなく、定常的な場が整備されるに至ったことは、「芝山巖精神」という表現を検討するにあたっ



寫眞は育英の先賢を祀る現在の芝山巖祠

写真1

て重要な意味を持っている。それは、前節の最後に触れた志保田銚吉の文章で触れられていたように、「教育者外の参拝者の一人が巻頭の「芝山巖精神」といふ語」を目にすることになったのは、芝山巖でおこなわれた祭典の場で頒布された『台湾教育』によってであったことに象徴されている。前節で検討したとおり「芝山巖精神」という表現はその使用にあたって、まずは「諸先輩」たちが体現した「精神」という漠然としたイメージのもとで語られていた。このような曖昧な「精神」が、芝山巖という具体的な場と、伊沢修二や「六氏先生」、あるいは芝山巖に合祀されている教員たちといった「顔の見える」個別の人々の姿とともに想起され、その場と人々をめぐる物語を含んだものとして「芝山巖精神」という言葉が使われるようになっていった。1930年の「神社同様の体裁」をまとった施設の整備は、まだそうした形で一部の人々のあいだで使われはじめたに過ぎない「芝山巖精神」という言葉の背景にある物語を、年一回開催される祭典のときだけに想起されるのではなく、年間を通して恒常的に反復・共有しうる場が提供されたことを意味していた。

そのような位置づけのもとで「神社同様の体裁」をまとった施設が整備された芝山巖を捉えた場合、継続的に芝山巖へ足を運び、芝山巖という場へのかかわりを深めていた存在として想起されるのは、芝山巖でおこなわれる祭典に参加し、芝山巖への「参拝」をくりかえしおこなっていた学校教職員や生徒たちであった。

2. 「芝山巖祭」への学校教職員・生徒の動員

学校教職員や生徒による芝山巖への「参拝」の状況について、まず、毎年2月1日に開催されていた「芝山巖祭」への団体参拝について検討する。以下の表1は『台湾教育』誌上に掲載された「芝山巖祭」関連記事のうち、祭典への団体参拝者数と団体名が確認できる1925年、および1928年から1934年までの教育機関による団体参拝をまとめたものである。丸印を付けた年に当該教育機関が団体参拝をおこなったということであり、1931年以降の丸印の横に付した数字は、

記事中に報じられた参拝者数を示している。なお、前節で触れたとおり、1925年は「芝山巖三十年祭」が開催された年であり、『台湾教育』誌上に初めて団体参拝者数が掲載された年でもある。

表1 教育機関による「芝山巖祭」団体参拝（1925年および1928-1934年）

	学校名	1925	1928	1929	1930	1931	1932	1933	1934
高等・中等教育機関 実業学校 盲啞学校	台北帝国大学				○	○	○ 78	○ 71	○ 50
	台北高等学校	○	○	○	○	○	○ 42	○ 34	○ 45
	台北高等商業学校	○	○	○	○	○	○ 60	○ 57	○ 66
	台北高等農業学校	○		○					
	女子高等学院						○ 5	○ 30	○ 30
	台北医学専門学校	○	○	○	○	○	○ 62	○ 70	○ 42
	台北第一師範学校	○	○	○	○	○ 265	○ 288	○ 200	○ 250
	台北第二師範学校		○	○	○	○ 314	○ 281	○ 312	○ 321
	台北第一中学校	○	○	○	○	○ 200	○ 200	○ 207	○ 203
	台北第二中学校	○	○	○	○	○	○ 36		○ 70
	台北第一高等女学校	○	○	○	○	○ 630	○ 747	○ 800	○ 800
	台北第二高等女学校	○	○	○	○	○ 370	○ 432	○ 450	○ 450
	台北第三高等女学校	○	○	○	○	○ 626	○ 143	○ 600	○ 630
	台北工業学校	○	○	○	○	○ 750	○ 718	○ 720	○ 756
	台北商業学校		○	○		○	○ 600	○ 670	○ 710
	商工学校	○	○	○	○	○ 160	○ 142	○ 200	○ 195
	曹洞宗中宗林	○	○	○	○	○	○		○ 5
	静修女学校	○	○	○	○	○	○ 370	○ 400	○ 450
	女子職業学校	○	○		○	○ 103	○ 180	○ 180	○ 177
	台北盲啞学校			○	○	○	○ 72	○ 55	○ 56
公学校・分教場（台北州）	台北第一師範附属公	○				○	○ 28	○ 100	○ 92
	台北第二師範附属公		○	○		○	○ 120	○ 98	○ 80
	士林公学校	○	○	○	○	○ 711	○ 662	○ 650	○ 900
	北投公学校	○	○	○	○	○	○ 64		
	草山公学校	○	○	○	○	○ 106	○ 82	○ 274	
	草山公学校坪頂分教場			○		○	○ 34	○ 51	○ 41
	関渡公学校			○	○		○ 35	○ 204	○ 3
	蓬萊公学校				○	○ 294	○ 269		○ 426
	大橋公学校		○	○	○	○ 446	○ 466	○ 530	○ 600
	太平公学校	○	○	○	○	○ 358	○ 408	○ 210	○ 350
	老松公学校		○	○	○	○ 446	○ 189		
	龍山公学校	○	○		○	○	○ 116	○ 137	○ 211
	日新公学校	○		○	○		○ 433	○ 260	○ 451
	大龍峒公学校	○		○	○	○ 112	○ 120	○ 170	○ 160
	内湖公学校		○	○	○	○		○ 60	○ 64
和尚洲公学校	○			○					

その他	和尚洲農業補習学校				○				
	木柵農業補習学校							○ 23	
	三角埔農業伝習所								○ 26
	三角埔簡易国語講習所								○ 60
	慈恵義塾	○							
	成徳学院		○	○					
	社後書房				○				
	汐止社書房							○ 4	
総数	3,500	不明	不明	不明	7,300	不明	10,364	10,340	

出典：「芝山巖三十年祭記事」（『台湾教育』第273号、1925年3月）71頁。「芝山巖祭典記事」（『台湾教育』第307号、1928年3月）36-37頁。「芝山巖祭典記事」（『台湾教育』第320号、1929年3月）88-89頁。「芝山巖鎮座祭並例祭記事」（『台湾教育』第332号、1930年3月）101-102頁。「芝山巖祭典記事」（『台湾教育』第344号、1931年3月）76-77頁。「第三十七回芝山巖祭典記事」（『台湾教育』第356号、1932年3月）60-61頁。「芝山巖祭典記事」（『台湾教育』第368号、1933年3月）64頁。「芝山巖祭典記事」（『台湾教育』第380号、1934年3月1日）104-105頁。

注：1931年以降の数字は参拝者数。1926年・1927年は団体参拝の状況不明。総数は教育機関以外も含めた参拝者数。

全体的な傾向としては、台北・基隆・宜蘭を含む台北州管下の高等・中等・初等教育機関が大半を占めており、その他、年によってわずかながら台北州外の学校（新竹州桃園郡新屋公学校、彰化第一公学校、高雄第三公学校）の参加や、書房からの参加も見られる。このうち、台北州外の諸学校の場合、新屋公学校については学校長経験者の高橋喜能が芝山巖に合祀されたことを理由に学校長と児童が参拝したことが、新屋公学校の沿革誌に記されている¹⁵。しかし、彰化第一公学校や高雄第三公学校の場合には、参拝した年およびその前後一年のうちに同校の教員が合祀されたという事実はなく、新屋公学校とは異なる理由による集団参拝だったものと推察される。また、書房からの参拝については、そもそも合祀者選定の基準のなかに書房が含まれているとはいえず、どのような理由から参拝に至ったのかを推察することが難しい¹⁶。

さらに、学校種別ごとの傾向を見てみると、高等・中等教育機関については台北州にあるほぼすべての学校が毎年参拝もしくは継続的に参拝していたことがうかがえる。他方、公学校や小学校といった初等教育機関については、参拝を継続している学校が比較的少ない。表1には当該期間中に団体参拝をおこなったとして一度でも名前が挙がった教育機関をリストアップしているため、一見すると多くの公学校や小学校が団体参拝を継続的にこなっていたように見えるが、このなかで1928年から1934年の7年間のうち、5回以上の集団参拝を確認できるのは、公学校17校（士林、北投、草山、関渡、大橋、太平、老松、龍山、日新、大龍峒、内湖、松山、石碑、朱厝崙、社子、基隆第一、坪頂分教場）と小学校4校（南門、旭、建成、寿）のみである。以下の図1にはこれらの学校の位置を芝山巖の位置と合わせて図示したが、基隆第一公学校も含め、ほとんどの学校が台湾鉄道（縦貫線、淡水線）の沿線に位置していることがわかる。芝山巖はいわゆる台北市域からは外れた地域に位置していたため、交通手段の有無が集団参拝の継続に影響した可能性が考えられる¹⁷。

また、当時の公学校および小学校の総数から見れば、団体参拝を実施した学校は限られていた。たとえば、1934年時点で台北州に設置されていた市・郡・街・庄立の公学校は分教場も含めて136校、同じく小学校は30校である。そのうち、1934年の「芝山巖祭」で団体参拝をおこなっ



図1 芝山巖および1928年から1934年のあいだに5回以上の集団参拝をおこなった公学校・小学校の位置

出典：台湾総督府臨時台湾土地調査局編『台湾堡図』、1904年を基に、芝山巖および学校の位置を記入

た公学校は21校、小学校は8校であり、公学校では全体の15.4%、小学校では同26.7%が団体参拝をおこなったにとどまる。台北州にある初等教育機関のなかでも、「芝山巖祭」に団体で参加した公学校および小学校は多数派ではなかった。

初等教育機関の団体参拝におけるこうした傾向は、そのまま高等・中等教育機関と初等教育機関とのあいだの団体参拝者数の差としても表れていた。教育機関ごとの詳細な参拝者数が掲載されている1932年から1934年までの、高等・中等教育機関とそれ以外の教育機関との団体数および参拝者数を比較すると、以下の表2のとおりである。

表2 1932年から1934年の団体数および参拝者数

	高等・中等教育機関		その他の教育機関	
	団体数	参拝者数	団体数	参拝者数
1932年	22	4,639	25	4,426
1933年	20	5,322	29	5,025
1934年	22	6,018	31	4,715

出典：「第三十七回芝山巖祭典記事」（『台湾教育』第356号、1932年3月）60-61頁。「芝山巖祭典記事」（『台湾教育』第368号、1933年3月）64頁。「芝山巖祭典記事」（『台湾教育』第380号、1934年3月1日）104-105頁。

表2より、「芝山巖祭」の団体参拝者数は高等・中等教育機関とその他の教育機関とのあいだで拮抗するなかで、前者が多数を占めていたことがうかがえる。

ただ、以下の表3にまとめたように、団体参拝をおこなった機関名が明示されなくなった1935年以降も含めた団体参拝数および参拝者数の推移を見ると、もう少し長い視点で傾向を探る必要がある。

表3 1925年および1928-1942年までの団体数および参拝者数

年	参拝団体数	団体参拝者数	年	参拝団体数	団体参拝者数
1925	49	3,500	1935	55	不明
1928	38	不明	1936	50	不明
1929	48	不明	1937	50	10,993
1930	47	不明	1938	68	13,803
1931	47	7,300	1939	80	16,521
1932	47	不明	1940	101	21,237
1933	49	10,364	1941	81	21,600
1934	53	10,340	1942	96	17,600

出典：1934年以前は表1と同じ。1935年以降は『台湾教育』以下各号所収の「芝山巖祭典記事」および「芝山巖通信」。第392号（1935年3月）、第404号（1936年3月）、第416号（1937年3月）、第428号（1938年3月）、第440号（1939年3月）、第452号（1940年3月）、第464号（1941年3月）、第476号（1942年3月）。

注：1935年以降の参拝団体数・団体参拝者数は教育機関以外も含めた総数。

「芝山巖祭」への団体参拝の傾向は、表3を見る限りでは1938年から1940年にかけて顕著な増加傾向が見られる。ただし、この数のなかには史料の制約から教育機関以外の団体の数も含まれており、教育機関による団体参拝の傾向を見て取ることはできない。

以上の検討から、「芝山巖祭」への団体参拝にあっては高等・中等教育機関による団体参拝が多い傾向が見て取れる。この点を踏まえたうえで、その他の機会における学校教職員および生徒による芝山巖への参拝状況を検討する。

3. 「芝山巖祠」への通年参拝

『台湾教育』には1930年2月以降、つまり上述した「神社同様の体裁」を持った施設が芝山巖に整備されて以降、前項で検討した「芝山巖祭」での参拝者数以外に、一年間の参拝者総数が毎年掲載されている。これに基づき、以下の表4に、1930年2月以降1942年1月までの各年の参拝者数をまとめた。

分類の方法が毎年変わっているため参拝者数の変化を厳密に比較することはできないが、前項の「芝山巖祭」の参拝者数と比較すると、公学校・小学校の参拝者数が相対的に多く、中等学校以上の参拝者数が少ない。毎年、公学校・小学校の職員児童の参拝者数は全体の参拝者数の80%前後、割合としてもっとも低い1937年2月から1938年1月でも全体の約69%となっており、通年参拝の多くは公学校・小学校の教職員および児童だったことがうかがえる。つまり、中等学校以上の生徒の多くは年一回、毎年2月の「芝山巖祭」への参拝がほぼ唯一の参拝機会であったのに対し、公学校・小学校児童の多くは、年間を通じて参拝の機会が設けられていたと考えられる。

表4 1930年2月から1942年1月までの参拝者数

年	小・公学校職員児童	中等学校職員生徒	教育関係者	その他	合計
1930	8,441 (内、引率職員 217)	1,759 (内、引率職員 84)	228	536 (学校職員)	11,630
1932	10,022	1,189	194 (教職員・教育関係者)	233 (その他職員児童) 75 (島外学生)	12,573
1933	11,235	1,571	168	177 (その他職員児童)	13,654
1934	2,827 (小学校) 10,087 (公学校)	863 (男子中等学校) 485 (女子中等学校)	195	218 (国語講習所生徒) 60 (島外学生)	15,578
1935	15,008	2,589 (中等学校以上)	242	—	18,864
1936	19,433	943 (中等学校以上)	309	62 (島外教育関係者) 86 (島外学生)	22,959
1937	17,975	4,389	656	—	26,218
1938	18,768 (小・公学校児童)	2,770 (中等学校以上)	513	—	25,851
1939	23,723	4,529	565	—	31,234
1940	25,314 (諸学校団体)		—	1,078 (教職員)	28,711
1941	30,183 (学校団体)		351	—	35,015

出典：「芝山巖の参拝者数」『台湾教育』第343号、1931年2月、87頁。「芝山巖記事」『台湾教育』第368号、1933年3月、58頁。「芝山巖記事」『台湾教育』第380号、1934年3月、106頁。「芝山巖記事」『台湾教育』第392号、1935年3月、64頁。「芝山巖記事」『台湾教育』第404号、1936年3月、68頁。「芝山巖記事」『台湾教育』第416号、1937年3月、57頁。「芝山巖記事」『台湾教育』第428号、1938年3月、74頁。「芝山巖記事」『台湾教育』第440号、1939年3月、68頁。「芝山巖通信」『台湾教育』第452号、1940年3月、86頁。「芝山巖通信」『台湾教育』第464号、1941年3月、77頁。「芝山巖通信」『台湾教育』第476号、1942年3月、88頁。

注：各年の統計対象時期は1930年のみ1930年2月から同年12月まで、1932年以降は当該年の2月から翌年1月までである。なお、1931年については参拝者に関する数値が『台湾教育』上に掲載されていない。また、各年の当該記事に表記のなかった項目については「—」とした。

ただし、「芝山巖祭」の団体参拝と同様に、公学校および小学校の在籍児童や教職員の総数から考えれば、芝山巖に参拝していた人々の割合は多いとは言えない。たとえば、小学校と公学校それぞれの参拝者数が見られる1934年2月から1935年1月の参拝者数を、1934年度に台北州に開設されていた公学校および小学校の教職員数・児童数と比較すると、小学校の場合は全体の16.6%、公学校では全体の13.9%が参拝していたことになる¹⁸。なお、参拝者数はのべ数であり、実際の割合はこの数値よりも低かったものと推測される。

以上の検討から、1920年代後半から1930年代にかけて、高等・中等教育機関と初等教育機関とのあいだで芝山巖への団体参拝の傾向が異なるなかで、公学校や小学校児童には年間を通じて芝山巖に足を運ぶ機会が設けられていた。ただし、それは台北州下の公学校および小学校に限られ、しかも芝山巖に参拝していた児童の割合は台北州下の学校全体の児童数の2割にも満たない程度であった。こうした状況は少なくとも1930年代を通じて大きな変化はなく、台北州外はもちろんのこと、台北州管下の学校に通う児童のなかでも芝山巖に参拝したことがない児童が数多く存在していたものと考えられる。

第3節 芝山巖に参拝しない学校における活動

前節で検討したように、1920年代後半から1930年代にかけて、高等・中等教育機関から初等教育機関の教職員や生徒・児童には、それぞれ形で芝山巖への団体参拝の機会が設けられていた。ただし、そうした機会に実際に芝山巖へ足を運んでいた人々はそれほど多かったわけではなく、芝山巖に参拝したことのない生徒・児童も数多く存在していたと考えられる。それでは、芝山巖への団体参拝をおこなっていなかった学校では、芝山巖は無縁の存在であったかといえば決してそうではなく、芝山巖への参拝とは異なる形で「芝山巖」という存在を意識する機会が学校教育を通じて設けられていた。

たとえば、公学校で使用されていた教科書のうち、台湾人生徒用の国語教科書であった『公学校用国語読本（第一種）』巻12（1926年8月初版、いわゆる第三期国語教科書）、『公学校用国語読本』巻12（1942年8月初版、いわゆる第四期国語教科書）、および修身科で使用された『初等科修身』三（1943年12月初版、いわゆる第三期修身教科書）において、「芝山巖」と項目立てられた内容が掲載されている。このうち、国語教科書の内容は、芝山巖へ参拝に行く児童の視点から、早朝に自宅を出て芝山巖へ参拝し、山を下りるまでの行程とともに、芝山巖の雰囲気や「六氏先生」に対する児童の心情が描かれるような構成となっている。ただし、第三期国語教科書のほうは参拝への行程を淡々と描写するような内容になっているが、第四期国語教科書では「六氏先生」の「犠牲献身」や「台湾教育の根本精神」を強調する内容となっている。芝山巖に参拝したことのない子どもたちも教科書の記述を通じて参拝を体験できるような内容ではあるが、そこに込められた「精神」が教科書の記述として強調されるようになるのは、1940年代以降のことであったことがうかがえる¹⁹。

また、芝山巖への直接的な参拝ではなく、「幣帛料」の献納や灯笼などの寄贈が学校単位でおこなわれていたケースも、芝山巖への参拝とは異なる形で「芝山巖」という存在を意識する機会のひとつとして挙げることができる。台湾教育会の機関誌『台湾教育』には1930年以降、「芝山巖記事」や「芝山巖通信」といった特別欄が毎号設けられているが、そのなかに「幣帛料献納」や「献納寄贈」のリストが掲載され、個人名とともに団体名も数多く挙げられている。一例として、1933年2月から1934年1月までの一年間の「幣帛料献納」および「献納寄贈」リストのうち、教育機関名が明示されているところを挙げると、以下のとおりである²⁰。

「幣帛料」：「台北第一師範学校」、「台北市寿小学校児童」、「北新庄子公学校」、「旗山第一公学校」、「台北大橋公学校児童」、「基隆第一小学校児童」、「台湾商工学校」、「淡水公学校」、「愛育幼稚園」、「伯岡公学校」、「江子翠公学校」、「台北市寿小学校〔上記「児童」とは別か?〕」、「大雅公学校」、「海墘厝公学校」、「新竹女子公学校」、「彰化商工補習学校」、「高雄第一公学校」、「台中師範学校」、「台北蓬萊公学校」

「献納寄贈」：「一 白砂利 七〇袋 花蓮港小学校修学旅行隊職員児童／一 白砂利 二二袋 花蓮港小学校出身第一第二師範学校生徒」

この例に見られるように、「幣帛料献納」や「献納寄贈」のなかで「小学校児童」や「学校生徒」というように「児童」もしくは「生徒」と特記されている場合は、前節で検討した桃園郡新屋公学校の事例のように、児童あるいはその家庭から寄付金などを徴収していた可能性が高く、そうした活動・行為に付随する形で芝山巖の存在が語られていたものと推察される。これも「幣帛料」や「白砂利」などを「献納」することが可能な、「神社同様の体裁」を備えた「芝山巖祠」が整備された状況だからこそ教育活動としておこなわれるようになったものと捉えることができ、「形あるもの」と「形を持たぬ」ものとの相互作用のありかたをここに見出すことができる²¹。

また、芝山巖という存在について学校内で語る機会というのは、授業や上記のような活動をおこなうときにだけ限定されていたわけではなく、機会をとらえて訓話などがおこなわれていた。一例として、詳細な沿革誌が残されている台南州新化郡の新化農業補習学校を挙げると、1933年2月1日に「芝山巖祭二付、遥拝訓話」、1935年2月1日には「芝山巖祭典二付キ生徒二対シ一場ノ訓話ナシ後台北二向ヒ遥拝ヲナス」、そして1937年2月1日には「芝山巖祭二就キ訓話ス」といった記述が沿革誌中に見える²²。「芝山巖祭」がおこなわれる2月1日に、「遥拝」および「訓話」がたびたびおこなわれていた様子が見て取れる。

以上のように、芝山巖に参拝しない、あるいは地理的な距離の関係などで参拝が困難な学校においても、教科書に「芝山巖」が登場した授業時や「献納」および寄付行為、あるいは「遥拝」や「訓話」といった行為を通じて、日常の教育活動のなかで芝山巖を意識する、あるいは意識させるような活動が各所で展開されていたものと推察される。芝山巖という具体的な場所や、そこに設けられた「芝山巖祠」、およびその場所でおこなわれる「芝山巖祭」は、芝山巖への参拝という行為を促すだけでなく、教科書の構成内容や日常の教育活動における様々な活動を生起させる契機にもなっていたといえるだろう。

おわりに

「はじめに」で触れたように、「芝山巖精神」という言葉があたかも植民地教育を担っていた人々の「日常の心構え」として、時代を超えても通用するかのような考え方に対して、本稿は「芝山巖精神」という言葉が生起したプロセスについて検討を加えた。まず「芝山巖精神」という言葉が台湾教育会の機関誌『台湾教育』で顕著に使われるようになったのは1928年以降であり、しかも、この言葉が新奇なものとして一般の人々に捉えられていただけではなく、学校の教職員や児童・生徒のあいだにも、それがいったいどういう「精神」であるのかが理解されていたとは言い難い状況だったことを指摘した。

そのうえで、そのような状況の改善が意識されるなかで、毎年2月1日に開催されていた「芝山巖祭」への教育機関による団体参拝や、1930年の「芝山巖祠」の整備を契機とする通年参拝など、1930年代には教職員および児童・生徒が芝山巖を来訪する機会が定期的に設定されるようになっていった。これはいわば、校種別あるいは地域別に異なった、多様なかわり方のチャンネルが形成されており、それぞれの学校の教職員や児童生徒にはそれぞれの形で、芝山巖とい

う存在、および「芝山巖事件」に対して意識をする契機が提供されていたと見ることができる。

ただし、「芝山巖祭」への団体参拝や芝山巖への通年参拝をおこなっていた学校は、1930年代に開設されていた学校全体から考えれば、その割合は台北州下の学校でせいぜい2割程度、台北州外の学校からの参拝は散見される程度にとどまっていた。また、芝山巖への通年参拝の多くは公学校・小学校の教職員や児童であり、一般の人々の参拝は一段と少なかったと推察される。このことから、1929年の時点で志保田銈吉が指摘していた、「世間一般の人にはこの人以上に芝山巖精神を知らない人が多いと思はれる。いやいや教育者間に於てさへまだまだこの事績と精神が徹底して居ないかとも思はれる」といったような状況は、1930年代後半に至ってもなお継続していた課題だったと考えられる。

1930年代の芝山巖と学校教育をめぐる以上のような状況から、「芝山巖精神」という言葉が自明のものとして一般の人々に向けても大きく「発揚」されるようになっていくのは、1930年代を経て、時代状況が大きく変動する戦時下、つまり1940年代に入ってからではないかと推察される。ただし、それは単純に時代が変化したことによって注目度が高まったということではなく、その時期までに、限定的とはいえ教育界において、「芝山巖祠」や「芝山巖祭」といった具体的な場が準備されたなかで、各学校における教育活動を通じて芝山巖がどのような場であるのか、そこでどのようなことが起こったのかということに触れる機会が教職員や児童・生徒に提供されていたことによって、そうした機会に芝山巖に触れていた彼ら・彼女らが社会へのかかわりを深めていく1940年代に至って、注目されるようになっていったものと考えられる。こうした意味において、1920年代後半から1930年代の芝山巖をめぐる動きは、「形を持たぬ」ものとしての「芝山巖精神」が、「形あるもの」や「具体的な場」が整備された芝山巖から、各学校の教育活動における多様なチャンネルを通じて、その内実を少しずつ獲得していくプロセスであったと捉えることができる。こうしたプロセスを経て形成された現実的な基盤のうえに、戦時下の「芝山巖精神」の「発揚」は可能になったといえるだろう。

ただ、本稿では教育活動を通じた芝山巖という場への実際のなかかわりかたに焦点をあてて論じたため、たとえば公学校や小学校の授業における芝山巖の取り扱いについては、教科書の記述について若干の検討を加えた以外には触れることができなかつた。この点は、学校の教職員や児童・生徒が芝山巖という場をより具体的なレベルで、どのようにイメージしていたのかということと関わる重要な課題だと考えられる。今後の検討を期したい。

付記

本研究はJSPS科研費19K02518による研究成果の一部である。

注

- 1 篠原正巳『芝山巖事件の真相』和鳴会、2001年、396-401頁。
- 2 篠原は上記注1に挙げた著書の奥付に付された「著者略歴」によれば、1917年生まれ、1919年渡台、「台中師範学校卒、台湾で小学校教員」と書かれている。台中師範学校が刊行していた『同窓会誌』に掲載されている「会員名簿」によれば、篠原は1936年台中師範学校卒、1939年時点で台中市立明治小学校勤務（『同

- 窓会誌』創刊号、1939年7月、25頁）、1942年時点で台中州豊原郡豊原国民学校訓導（『同窓会誌』第3号、1942年7月、39頁）となっている。
- 3 『台湾日日新報』1943年2月1日、2頁。
 - 4 上沼八郎「台湾における植民地教育行政史の一考察——「芝山巖事件」について——」『国立教育研究所紀要』第121号、1992年3月、111-122頁。
 - 5 上笙一郎「芝山巖事件と〈芝山巖精神〉」、日本古書通信社『日本古書通信』第1004号、2013年3月、36-37頁。
 - 6 1930年までの芝山巖をめぐる言動については、以下の論考において「芝山巖祭」の開催状況を中心に検討を加えた。山本和行「芝山巖の「神社」化——台湾教育会による整備事業を中心に——」、教育史学会『日本の教育史学』第59集、2016年10月、97-108頁、および山本和行「「芝山巖事件」の儀式化——「芝山巖祭」の開催に着目して——」、天理大学中国文化研究会『中国文化研究』第32号、2016年3月、55-76頁。
 - 7 山本和行前掲「芝山巖の「神社」化——台湾教育会による整備事業を中心に——」、98頁など参照。
 - 8 吉野秀公『台湾教育史』吉野秀公、1927年、38頁。
 - 9 『台湾日日新報』1938年2月1日、4頁。
 - 10 『台湾日日新報』1942年1月24日、夕刊、2頁。
 - 11 この点については、山本和行前掲「芝山巖の「神社」化——台湾教育会による整備事業を中心に——」、104-105頁、参照。
 - 12 「芝山巖祠祭典記事」『台湾教育』第488号、1943年2月、88頁。
 - 13 『台湾日日新報』1943年2月1日、2頁。
 - 14 『台湾日日新報』が1942年10月に掲載した記事によると、この時期に以下のような「芝山巖祠」の「神社昇格」を目指した動きが生じていた。このことは、1942年10月の時点で「芝山巖祠」が制度上、未だ「神社」として位置づけられていなかったことを示している。「芝山巖祠の神社昇格基金へ／豊永翁毎月寄附／北投の興亜工業社長豊永三郎翁は豫て芝山巖の六士を敬慕、芝山巖祠の神社昇格を熱望し数年前、百五十円を之が昇格基金として寄附したが、今回還暦祝の費用を節約三百円を寄附し尚今後毎月六十円宛連続寄附したいと七日台湾教育会に申出で、周囲を感激せしめた」（『台湾日日新報』1942年10月8日、3頁）。
 - 15 「（1929年）二月一日 前校長故高橋喜能芝山巖二祀シニ依リ職員児童総代トシテ校長山口品次郎、第六学年児童彭昌發参拝ヲナス 尚児童一銭宛徴収シ御供物ヲ送ル」とある。山本和行「台湾桃園市新屋国民小学所蔵「新屋公学校沿革史」（二）」『天理大学学報』第70巻第1号、2018年10月、一六頁。
 - 16 台湾教育会が1925年に定めた合祀基準によれば、合祀の対象者は「本会々員たる学校教員及び直接教育事務に従事する者」となっており、そのなかでも「本島人」については「本島人十五年以上本島に勤務し在職中死亡した者の中、特に功勞有る者として合祀方所属官庁から推薦して来たもの」とされており、書房教師は対象者として想定されていなかったことがうかがえる。「芝山巖三十年祭記事」『台湾教育』第273号、1925年3月、67頁。
 - 17 なお、学校生徒による集団参拝の様子について、『台湾教育』の記事中には「士林街道草山街道には早朝から参拝の各学校児童、生徒が蛸々と続いてゐた」（「芝山巖祭典記事」『台湾教育』第404号、1936年3月、64頁）という表現がたびたび見られる。「士林街道」は台北市中心部から台湾神社に至る南北の「勅使街道」の北に位置する街道であり、「草山街道」は士林から陽明山へとつながる、現在の「仰徳大道」にあたる道路である。草山公学校や坪頂分教場の生徒は「草山街道」を経て、そのほかの学校生徒は「士林街道」を経て、それぞれ芝山巖へたどり着いていたと考えられる。ただし、子どもたちの移動手段がどのように確保されていたのかということは資料からは詳らかではなく、更なる調査を要する。
 - 18 1934年度の台北州における公学校の教職員数（1,229名）および児童数（71,147名）、小学校の教職員数（342名）および児童数（16,718名）より算出した。台湾総督府文教局『昭和九年度台湾総督府学事第三十三三年報』台湾文教局、1936年、27頁、31頁、69頁、89頁。
 - 19 なお、『初等科修身』三の「芝山巖」の内容は、芝山巖事件の顛末を描く内容であり、「六氏先生」の「忠義」を強調している。また、国語教科書・修身教科書ともに、「芝山巖精神」という言葉は使用されていない。
 - 20 「芝山巖記事」『台湾教育』第368号、1933年3月、58-59頁。
 - 21 なお、別稿において、1930年に「芝山巖祠」が整備されて以降、それまで散発的にしかおこなわれていなかった学校による「献灯」（灯籠献納）の規模が拡大していったことを指摘した。山本和行前掲「芝山巖の「神社」化——台湾教育会による整備事業を中心に——」、105頁。
 - 22 北村嘉恵・樋浦郷子・山本和行「新化公学校沿革誌」「新化農業補習学校沿革誌」——植民地台湾の教育史——」『北海道大学大学院教育学研究院紀要』第126号、2016年6月、203頁、209頁、214頁。